
天使の声

芯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の声

【コード】

N3982D

【作者名】

芯

【あらすじ】

ある日、眠っているときに半女子恐怖症の藤堂碧意（あまのい）は自分を呼ぶ声が聞こえた。その日から、少しずつ彼と彼の日常に変化が訪れた。

1 (前書き)

初投稿です。

まだまだ、修行が必要ですがよかったですらどうぞ。

「・・・お・・・君。あ・・・い君」

「んっ」

ゆっくりマブタを開けた。

壁にかけてある時計を見てみると、6時30分をさしていた。

むくつと体を起こし、まだ半開きの目をこすった。

何だったんだろ、さっき寝ているときに聞こえた声。

神さまのお告げとか？

まさかな

そついう系は、あまり信じていない俺。

東堂 碧意
とうどう せいい

高1

たしか、女性で俺と同じ年ぐらいの声だったな。髪は、少し色素が薄く胸のあたりまで長かった。顔はよく見えなかったけど、きれいな顔をしていた。

ベランダの窓のカーテンの隙間から太陽の光が漏れて部屋に入っていた。

ベッドから抜けカーテンを開けた。

腕を組んでガラにもなく考えてみた。

しかし、全く分からず逆に謎が深まるばかりだった。

そんな風に考えている俺とは正反対に空はとても青く、雲一つない晴天だ。

俺は、両手を高くあげのびをした。

「さーて、今日もがんばるか！」

そして、リビングへと向かった。

2 (前書き)

更新は不定期です。

自分の部屋から出て、玄関のつきあたりにあるリビングへ向かった。

あ、いい忘れてたけど俺今年から1人暮らしを始めたんだ。

別に、親がイヤとか反抗期だからとかじゃない。

ただ、自分でどのくらいやれるのかわかりたかったんだ。

俺の両親は、会社を経営してて物心ついたときには日本を代表するような大きな会社になってた。

父さんと母さんが仕切ってて、諸外国に支社とかがあるから度々飛行機に乗っては

ヨーロッパやアメリカとかに行ってた。

実家は、ここから少し離れたところにある。

使用人とかメイドとかいてあまり不自由はしなかった。

欲しいものがあればすぐ手に入る。

行きたいと思った場所には、専属の運転手が乗せて行ってくれる。

けど、このままではいけないと思った。

そのうち、何も自分でできなくなる。

そう実感した。

対面式のキッチンに入り、食パンをトースターに入れた。

冷蔵庫から牛乳を取り出しマグカップに注いだ。

最初『1人暮らしをしたい』と両親に言ったら、とても両親は反対して、一時期家の中にピリピリした空気と亀裂が入っていたりした。でも最終的には、二人とも『仕方ないな』と降参気味に、このマンションに住むことと今通っている高校に入学することを条件に許してもらった。

今思い出しても、あ那时的家は相当やばかったと思う。

そんな思い出に浸っていると何か焦げているようなニオイがしてきた。

「やばー!」

食パンをトースターから取り出した。

案の定食パンは、ほんの少し黒く変色していた。

あちゃ〜

最近上手く焼けてたのに

まだまだ、修行不足だと感じた。

テーブルにさっきの食パンとマグカップとマーガリンを並べた。

まだ、こんなもんぐらいしか朝食のレパートリーがないがこれからはもっと増やしたいと思っている。

両手を合わせて

「いただきます」

と言って、食べ始めた。

朝食も食べ終え、洗い物も済ませた。

洗面所に行き歯磨きをしっかりし、顔を洗った。

髪型も1人暮らしをするようになってから、工夫し始めた。

中学のときは、いわゆる坊ちゃん刈りだった髪も最近少し伸ばし、ワックスを使うようになった。

雑誌とかでも髪型を研究している。

4月の頃は、つけすぎたり足りなかったりして相当苦労していた。でも、最近はもっとマシにはなったと思っている。

「ま、いつか。こんなもんで」

鏡を見て確認をした。

再び、自分の部屋に着替えをするために戻った。

今日は少し寒そうだから、このパーカー着てブレザーでも羽織っとくか。

自分で納得して着替え始めた。

制服は、ほぼ自由といっても過言じゃない。

男子は、冬はとりあえず指定の黒のブレザーを着て、指定のチェックか黒のズボンをはいていれば別に問題ない。

女子も、指定の黒のブレザーを着て指定のチェックか黒のスカートをはいていれば大丈夫である。

シャツとかネクタイとかも自由で、ただ学生として相応しい色のものであればなんでもOKという制服である。

最後に姿見用の鏡でチェックをした。

時計を見てみると、いつもどおり7時30分を指していた。机の上に置いているカバンを持った。

最後に家じゅうの戸締りを確認した。

最近買ったばかりの新しいスニーカーを履き、玄関のドアに鍵をかけて学校へと向かった。

エレベーターで1階まで下りた。正面玄関の自動ドアを出ると冷たい風がふいていた。

「うおっ、寒い」

思わず声が出てしまった。そして、反射的に手をブレザーのポケットに素早く入れた。

昨日は、もっとポカポカしていてマフラーなんかいらなくても大丈夫だったのに、今日はとてつもなく寒い。

マフラー、取りに行こうかな

一瞬そう思ったが、面倒くさいと思いやめた。

仕方なくトボトボと学校に向かって歩き始めた。

俺の通っている学校は「城栄学園」という私立で中・高・大とエスカレーター式の学校の高等部。

ここから、10分ぐらい歩いたところにある。

この学校は、俺みたいな会社社長の息子とか、有名人、著名人とかの子供が半分である。

しかも、自分では実感してないけどとても頭がいい学校らしく県内でもトップクラスの進学率で少々学費も高いらしい。

横断歩道の信号が点滅し始めたのに気づき渡ろうと思いきや軽く走ったが間に合わなかった。

学年に、2、3人特体生がいるらしい。12月の今になってもクラスが多いせいも殆ど顔と名前が一致しない人が多い。特に女子とか。多分俺は、卒業するまで全員一致しないと思う。

信号が青になった。

「お、おはよう。藤堂君」

黒と白の太いボーダーの暖かそうなマフラーを巻き、少し色素の薄いきれいな髪をサイドでくくった女子が急ぎ足で通りすぎて行った。

少し遅れて

「おはよう」

と俺も返した。チラッと顔は見たが名前が分からなかった。

さっき「思う」「思っていたことが今、俺の中で変な「自信」に変わってしまった。

あー、名前覚ええないとなー。

とても、実感してしまった。

なんだかんだ思っていると、向こうから野球部特有の低い声が聞こえてきた。

正面を見ると、いつも通り正門に高級車が入っていくのが見えた。同じ制服を着た人たちも。

正面に正門があるというのに、左の細い路地に入った。ここは、裏門に行く路地なんだ。

なぜこっちを通るかって？

ま、俺にも事情があるんだよ。

「キヤー！藤堂君！！」

背後から甲高い声が聞こえてきた。

ビクツツとして振り返ってみると、胸の前で手を合わせ目が異様に光っている女子がいた。

そのとたん、『えー！？うそ、うそー！！』『どいどいっ』『と他の

女子たちも集まってきた。

どいつもこいつも目を獲物を見つけたライオンのように光らせていた。

それを見た瞬間、ゾクッと全身に鳥肌が立ったのがわかった。

やばい。走らないと。

俺が走り出すよりもさきに後ろにいたメスライオン達が走ってきた。すぐそこまで迫ってきている。

身の危険を察じ、某陸上選手のように走り始めた。

角を右に曲がると、白い上品な校舎の外壁が見えてきた。裏門は今日は珍しく開いてなかった。

やべっ、どっしよ。

このまま、立ち止まったらモミクチャにされることが頭に浮かんだ。

それだけは絶対にイヤである。

えーい、こうなったら手段はこうしかない！

俺は、某陸上選手のような(?)スピードを生かし、門にそのまま向かっていった。

門のまん前で右足を踏み切る。がしつと門を持ち体を斜めにして門のうえを越え。無事着地した。

門の向こうを見てみると、メスライオンたちはぼか〜んと口を開けて立っていた。

そして、口々に『きゃー！かっこいい!!』『もう一回見たい!!』とか騒ぎ始めた。

誰のせいでこうなったと思ってんだろ……………。

どっと疲れた気がした。

「はぁー」と深いため息をついて、俺は、その場をそそくさと立ち去った。

4階にある教室についた。校舎は白で統一されていて、どの教室にも冷暖房完備している。

つたく、疲れた。

もう授業つける気がしない。

教室のドアを開けて入った。

窓側の暖かい自分の席に座った。

あー、疲れた。

机にうつぶせになった。

「おっはー!」

そういつたと同時に、背中に体当たりされられ強い衝撃が走った。

「うおっ、いってーな!」

背中をさすりながら、後ろを見てみると原野航一はらのしゅういちが立っていた。

こいつは、俺と同じクラスで唯一俺と親しい友達。

「いや、悪い。悪い」

頭をかき、笑いながら言っていた。もろ、悪気がなさそうに。

「いやー、俺には謝っているようには見えないんだけど」

「何言ってるんだよー。俺ちゃんとあやまっ」

「はいはい」

言葉の途中でわざと遮って言ってやり、再びうつぶせになった。

「えー。最後まで聞けよ!」

航一が机の前に場所を移動させた。

「んー、どーした?朝から倒れこんで」

「・・・・・・・・ライオンに追いかけられた」

「え!?!じゃあ、帰ろう!今日は危ない!」

「人間の女子にだよ」

「なんだ、人間か」

「人間に決まってるだろ」

ハ！っ！と心の中でため息をついた。

「イケメンも苦勞するんだな」

「イケメン言うな。全然うれしくない」

やっぱり、この両親譲りの少しホリの深い顔と高い身長は好きになれない。

中学同様、高校に入学して早々王子様扱いをつけている。だから、今日みたいに朝とか時々追いかけられる。

そのおかげで、俺は半分女子恐怖症だ。

「ま、俺がいるから大丈夫さ！ライオンからでも何からでも迎え撃つ！ー！」

肩にぽんと手を置いて、航一が明るく言った。

俺は、顔を上げた。

「俺は、航一の方が男らしいと思う」

「またまたそんなことー」

なんか、こいつといたら元気が出てくる。今日も1日がんばれそうな気がしてきた。

丁度そのとき、キーンコーンカーンコーン……とチャイムが

鳴った。

「じゃ

航一も席に戻っていった。

そして、いつものように、今日が始まった。

4
(後書き)

5 (前書き)

加筆修正しました。

放課後。帰り際に、担任の山本先生から図書室の整理の手伝いを頼まれた。

山本先生は、32歳位の女の先生で陸上部の顧問である。帰宅部だから暇といやー暇だから引き受けてしまった。

航一は、ああ見えて陸上部に入っている。

陸上部専用のグラウンドは体育館の隣にある。校門と真逆の方向にあるから、練習しているのはあまり見たことがない。でも、さぼっているのはよく見かける。

そして現に今、図書室に向かっている俺の隣に航一がいる。

「おい、どうしたんだよ。そんなに眉間にシワなんかよせてさー」
航一が、ウインドブレーカーのズボンをシャカシャカと鳴らせながらついでくる。

「おまえ部活行かなくていいのか？」

足を止めて言った。

「碧意見送ってから行く」

「見送り結構!!」

まあ、いいかとほぼ諦めて再び歩き始めた。

そして、図書室に着いた。

「はい、到着。ほら、とつとと行けよ」

手でシッシとしながら言った。

「ヘイヘイ。じゃ、またな」

「おう」

手をヒラヒラと振り、航一は来た道に戻っていった。

やれやれ、やっと行ってくれた。

気を取り直して、図書室のドアを開けた。

暖房がかかっている、暖かい。

辺りを見てみるが、先生が見当たらない。

ひとまず、荷物を空いている机に置いた。

「山本先生ー？」

呼んでみたが返事がない。

おかしいな。

図書室って言うってたしな。

立っているのもなんだから、とりあえず椅子に座った。

左手で頬杖をついた。

それにしても、今日のあの声何だった。

何か引っかかるんだよな。

忘れ物をしたときに、何を忘れたのか思い出せない時のような妙な
気持ちが胸の中に充満していた。

それに、どこかで聞いたことがあるような声だった。

いや、聞いたことがある声だ。

妙な気持ちと混じっているが、これだけは100%いえることだ。

1人静かな図書室が静寂に包まれているときだった。

「おまたせ。いやー、遅くなってごめんね」

勢いよくドアが開き、ジャージに着替えた山本先生とあとに続いて1人女子が入ってきた。

あ、あの子……。

「えーと、悪いけど先生すぐに部活の方に行かないと行けなくなつた2人でやつといてくれる？」

そう言いながら、ファイルを次々と俺の目の前に置いた。

「え……え!?!?どうしてですか？」

「また、脱走したあなたの友達を探しに行かないといけないの」

「そ、そうなんですか」

あの野郎、また脱走しやがったのか。

脱走しては、よく山本先生に捕獲されているのをしばしば見たことがある。

「だから、あとよろしくね。終わったら、職員室の私の机の上に置いていて」

「わ、分かりました」

山本先生は、そそくさと出て行った。

さーて……、これからどうしよう。

よく考えてみれば、先生とやると思っていたが今、別の女子とやらなければけない事態になっている。

半女子恐怖症の俺にとっては、大問題なことだ。

いや、でも世の中のすべての女子があんなメスライオンとは限らないし……。

女子を見てみた。

髪をサイドでまとめて……、制服は他のチャラチャラした人達と違い清楚に着こなしていて……。

あれ、

「もしかして、朝あつたりした？」

「あ、うん」

「やっぱりそうだったか」

「覚えてて……くれたんだ」

彼女の表情が少し和らいだ。

「うん。そのキレイな髪で思い出したんだ。あ、そろそろ始めよっか」

彼女も、そうだね、と言い荷物を置いた。

本棚の前に立ちファイルを開いてチェックを始めた。

「あ、そうだ、名前……聞いてもいいかな？」

苦笑しながら俺は言った。

「まみや 間宮 ちひろ 千尋です。よろしくね」

俺の失礼すぎる質問に彼女は、ニコツと笑って答えてくれた。

「間宮さんか。ごめんね、俺未だに名前覚えてなくて・・・」
「私も。だって人数多すぎだもんね」

彼女は苦笑しながら言った。

俺達は会話を交えながらチエツクを進めた。
以外だったのは、俺と同じクラスだということ。
今まで全く気が付かなかった。

そして、気づけば太陽が沈み星が出ていた。

「間宮さん終わったー?」

「うん、丁度終わったよ」

「よし、じゃあもう帰ろっか」

暖房のスイッチや電気などを確認して図書室を出た。
そこから、二人で職員室へ向かった。

「何か、東堂君って以外に面白い人なんだね」
突然彼女が言った。

「え、何その以外って?」

「んー、前までは何か近寄りたがたいっていう感じだったけど、今日
こうして話してみたら面白いんだなと思って」

「俺も今日こうして間宮さんと話せてよかったよ」

職員室の山本先生の机にファイルを置いた。

そして、玄関で靴に履き替えた。

暗いから途中まで一緒に帰ろうということになった。

「うわー、寒いし暗いね」

間宮さんが手を、ハーツハーツと吐息であたためた。

「そうだね」

アーチ型の校門を出た。

こんな漫画に出てくる形の校門ってあるもんだなとよく入学したばかりの時に思っていた。

「あ、そうだ！東堂君知ってる？」

「何？」

「B組みのNさんって、うちのクラスの原野君のこと好きなんだって」

「え！？まじで!？」

「ホント、ホント!」

今日こうして彼女と話していて分かったことがある。

それは、以外といろいろなことを知っていることだ。

俺は、彼女の情報網が不思議に思うぐらい。

あと見かけ以上に活発だということも。

そして、朝あつた信号に近づいてきた。

「明日も、学校で困ったときには話しかけてもいい？」

俺の目を下から見上げるように真っ直ぐ見ながら言った。

「うん。全然いいよ」

「よかった！じゃあ、また明日ね」

彼女は手を振りながら右に曲がっていった。

その背中を俺は見送った。

間宮さんって、何かかわいらしい人だな
しかも、結構面白い人だし

俺より小さな彼女の背中が見えなくなるまで見送った。
そして、再び歩き始め家についた。

5 (後書き)

更新遅れてごめんなさい (ーー;))

予定が狂いまくってしまいました・・・。

まだまだ、文章の修行が必要です。*。+。()、。。

6 (前書き)

あとがきに言い訳を書いています。

昼休み。

いつも通り航一と屋上で昼食を食べていた。最近の間宮さんと3人で食べている。

この時期屋上で食べるのはきついけど、周りが静かだから別にいいんだ。

「ちょっと！何でいつも原野君と一緒になの!？」

「俺だってお前なんかと何で昼飯を一緒に食わなきゃいけないんだよ!？」

ギャンギャンと聞こえてくる口論。最初のうちは仲が良さそうだったのに、最近じゃいつもこんな有様。むしろ、最初のうちは何だったんだろうって思ってしまう。

「お、美味そうな卵焼き。いっただけ」

そう航一は言うと、ひょいっと間宮さんのお弁当からほんのり焦げ目がついている卵焼きを摘まみ、口に入れた。

「あー！！ちょっと何勝手に食べてんのよ!！」

「へっ、この俺様と碧意君と一緒に弁当食べようなんぞ、百年速いんだよ」

何故か上から視線で航一が言い捨てた。

百年か・・・

ベターだな・・・

「なっ、何ですってー!!」

間宮さんが叫んだ。わなわなと震え、目がいつもの目ではなくなっていた。ヤバイ。

間宮さん、尋常じゃない・・・

黒いオーラが体から出ていた。それにもかかわらず、航一はぶつぶつとなにかを言っていた。

そして、

「あー…、全くこれだから元ヤ…んぐッ」

「なー!!!」

航一の口を叫びながら抑えた。

「ちよっ、ちよっと待っててね!藤堂君!」

そう言い残し、間宮さんは航一を掴みどこかへ行ってしまった。

ん?

元ヤ…?

元ヤってなんだろ?

『元野球部』?

いやいや、そんなわけない

じゃあ・・・何?

何だろっ?

んー、『元野菜好き』?

てか、なんでそんなこと航一が知ってた?

あいつ間宮さんのストーカーだったりするわけ!?

いや、そんなはずはない

いくらあいつが女好きでも、ストーカーまでには発展しないだろ

じゃー、・・・何？

「お、おまたせ」

グルグル頭を回転させて考えているときだった。間宮さんとその後ろに続いて航一が戻ってきた。

そして、さっきと同じように昼食を食べ始めた。

あー、気になる。気になる！

『元ヤ』の続きがあー

でもなんか聞きづらいしなおし。ここは聞いてみよう

ちょっと聞きづらいけど、聞いてみよう

「あ、あのさ・・・、間宮さん

「何？」

「さっきの『元ヤ』って何？」

「へ！？あ、あー、あれは・・・」

間宮さんの目線は宙を泳ぎはじめた。

「え・・・、え〜と・・・。そ、そう！元ヤドカリ好きなの！！」

「ぶッ」

航一が小さく吹きだした。

は、はい・・・？

「も、元ヤドカリ好き？」

一瞬、耳を疑ってしまった。

「そうなの！・・・家で育てていたの！！」

少し苦笑交じりで答えてくれた。

「そうだったんだ」

へー、意外だな

間宮さんって、ヤドカリ育ててたんだ

「お、おい碧意。そろそろ教室戻らないか？」

「あ、そうだな」

なんだかんだしていると、昼休みはあと5分しか残っていなかった。

次の授業は・・・、数学だっけ

そういえば宿題出されてたっけ
げっ

「お、俺。宿題やってなかった！悪い、先戻っとく」

購買のパンの袋を片付けながら言った。

「おー、分かった」

『がんばれよー』と航一が手を振ってくれた。

俺は、間宮さんと航一を残して屋上から教室へ帰った。

6 (後書き)

更新遅れてすいません(". . .)
パソコンの故障&テスト週間等いろいろなものが重なって更新でき
ませんでした。

これからは、更新ペースを上げて行きたいと思っています

今日は、土曜日。

何にもすることがなく、ぼーっと過ごしている。

あー、暇だな

何か面白いテレビやってないかな

テレビのリモコンに手を伸ばし、スイッチを押した。

土曜日だからあんまり面白いのやってないかもしれないな

チャンネルをかえてみるがどれも全く面白くない。

電気代がもつたいたいだけだからテレビを消した。

ソファアーにゴロリと寝転んだ。

どこか出掛けようかな

ふとそう思ったときだった。ピーンポーンと玄関のチャイムがなった。

ガバツと起き、玄関に向かった。

誰だろう？

航一だったらめんどくさいな。

ドアを開けた。

「やつほ〜」

「うっ」

急いでドアを閉めた。

な、なんだ？

あ、姉貴の姿が見えた

幻覚かな？

うん。幻覚だ。暇すぎて幻覚が見えたんだ

「え〜、ちよつと開けてよお!？」

外からドアを叩きながら姉貴の声が聞こえてきた。

「幻聴と幻覚が見えたな。うん。」

「誰が幻覚じゃー!!! ドア開ける!!!」

ポツリと呟いたはずだったのに、姉貴からツッコミが聞こえてきた。

「ちっ、仕方ない」

いやいや俺はドアを開けた。

「やっと開けてくれた〜」

「どうぞ。入れるのイヤだけど」

姉貴を家の中へ入れた。

姉貴の名前は、藤堂 朱莉

現在、俺の通っている城栄学園の大学1年生。

少し茶色に染めている長い髪に母さん譲りの長い手足。

小さい頃、よく俺はその長い手足にプロレスの技をかけられていた。

「へー、結構キレイに片付いてるのね」

長い前髪をかきあげながら言った。

「俺のほうが優秀だからさ」

ドスツとソファーに座った。

「は！？何それ！？意味わかんない！！とりあえず、何か飲み物頂戴！！」

「意味わかんないのはこっちのセリフだ！自分でいれてこい！！」

「はーやーくー」

仕方なくいやいや立ち上がり、キッチンに行った。

たく、自分でやれよな。

コップを食器棚から出した。

「いつものオレンジジュースでいいですか？」

「うん」

さっき俺が座っていたソファーに座り、テレビを見ていた。

あー、今時紅茶もコーヒーも飲めない大学生っているもんなんだな

コップにオレンジジュースを注ぎながら思った。

そう、姉貴は紅茶もコーヒーを飲めない。

俺は普通に飲むけど、なぜか姉貴は飲めないのだ。

だから、だいたいオレンジジュースとかを飲む。

お盆にコップをのせ、姉貴に持っていった。

「はい、どうぞ」

「さんきゅ〜」

俺からコップをもらうと、一口ジュースを飲んだ。

「はー、おいし〜」

「今時ダサイよね〜。コーヒーも紅茶も飲めない大学生」

「うるさい！いいじゃんか別に」

「あ、そうだ。はいこれ」

姉貴がテーブルの上にどこかのお菓子屋の紙袋を置いた。

「ん？なにこれ？」

中を覗いてみると、クッキーの詰め合わせが入っていた。

「どしたのこれ？」

「お母さんから。栄養失調になったらダメだからってさ」

「クッキーで栄養を補えと？」

「そっらしいよ」

意味分かん。

うちの母親は何を考えてんだ？

まじで。

「まあ・・・、有難く貰っておくよ」

「じゃ、私これで帰るね」

いつの間にかコップのジュースは空になっていた。
荷物をまとめ姉貴が立った。

「え！？もう帰るの？」

「うん。レポート書かないといけないし、それにアンタの顔見て来
いってお父さんとお母さんに言われてただけだし」

玄関に行き、姉貴は長いブーツを履いていた。
そして、立ち上がりクルッとこっちをむいた。

「あ、あとたまには家に帰ってこいだって」

「わかった」

「じゃ、またね」

そういうと、姉貴は帰っていった。

7 (後書き)

お姉さま登場！

私もお姉さまとおなじで、紅茶とかコーヒーが飲めません。(-

-、o)

まだまだ人生長いので、いつか飲めるようになったらいいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3982d/>

天使の声

2010年12月9日06時19分発行